前近代のリテラシー

長島　弘明

2011．10．27

国語教科書の源流―「往来物」の話―

現代の国語の教科書の源流は、江戸時代の寺子屋などで使われた初等教育用の本です。江戸時代、庶民の読み書きの教科書としては、『庭訓往来』『古状揃』などさまざまなものがありましたが、いずれも御家流と呼ばれる当時の標準的な行書体・草書体の漢字で書かれていました。それらの初等教育用の国語の本を、今日では「往来物」と呼んでいます。「往来」とはもともと往復書簡の意味で、「往来物」の中でも最もよく使われたものの一つである『庭訓往来』を例に取れば、一月から十二月までの毎月、さまざまな内容・テーマにわたる往復書簡を、原則として一組ずつ並べています。

例えば、巻頭の正月五日の手紙は次のように始まります。

春始御悦向貴方先祝申候畢。富貴万福猶以幸甚幸甚。（春の始の御悦、貴方に向て先づ祝ひ申し候ひ畢ぬ。富貴万福猶以て幸甚幸甚。）

「新春のよろこびを、まずその年の恵方（福神がいる方角）に向かってお祝いいたしました。あなた様も、富貴・ご多幸でお過ごしのこととおよろこび申し上げます。」というような意味です。子どもは『庭訓往来』を通じて、当時は手紙から帳簿に至るまで、実用的書体として楷書よりも多く使われた行書・草書を学び、また書簡独特の用語や形式を勉強したのでした。それだけではありません。漢文の訓読を学ぶのも、この『庭訓往来』を通じてのことが多かったのです。また『庭訓往来』は、一つの手紙の中で同種の用語を列挙するという工夫もしており、例えば三月の往復書簡には、農業用語・建築用語や庭木の名がたくさん挙げられています。これを読んだ子どもは、日常生活に必要な各種の語彙をもここから学ぶことができたのです。

文字も語句も実用文も漢文も学べる『庭訓往来』は、今日の高校の国語教科書と比べてみると、「国語総合」に近いでしょう。また源義経が兄頼朝に宛てた「腰越状」など、歴史上の有名な手紙を収めた『古状揃』の方は、古典文学の要素も入っていて現在の「古典」の教科書に似ています。江戸時代の「往来物」と今日の教科書との意外な近さには改めて驚かされます。（長島弘明）

★庭訓往来　ていきんおうらい　二巻。往来物。著者未詳。内容より、南北朝後期ないし室町初期、中層武家の著と推測される。現在最古の写本は、興福寺の経覚大僧正筆本（講堂文庫蔵）。経覚の没文明五年（一四七三）八月であるから、これ以前の筆写。

【内容】一年一二か月分に手紙文を配して、一か月往返２通ずつ計二四通と、「八月一三日状」（写本によっては同一二日状）一通を加えた二五通より構成されている。ここに収める手紙文は、ただ模範文・模型文としてのみ提示されているのではなく、それぞれの手紙のなかに、当時の社会生活に必要な数多くの語彙を類別に列挙した単語集団を設けて、

これを手習わせるのを大切な目的の一つとしている。即ち、類別単語集団をはさんで二つに分解された手紙文の半分ずつを首尾の両端にすえ、つなぎ合わせるとまとまった一通の手紙となるよう工夫してある。各手紙の主題としたところは、新年の会（一月）、詩歌の宴会（二月）、地方大名の館造（三月）、領国の繁栄（四月）、大名高家の饗応（五月）、盗賊討伐への出陣（六月）、遊伎（田楽か）の競伎会（七月）、司法制度・訴訟手続き・将軍の威容（八月）、寺院における大法会（九月）、大斎の行事（十月）、病気の治療法（十一月）、地方行政の制度（十二月）等に及ぶ。また、収録語彙を部門別にすると、衣食住三七〇語、職分職業二一七語、仏教一七九語、武具七十五語、教養四十六語、文学十六語、その他六十一語、合計九六四語となる。もって教育史のみでなく、政治史・経済史・文化史・風俗史など、歴史学の多くの分野で貴重な資料であることがわかる。

【普及】すでに室町・安土桃山時代において、前記経覚筆本はじめ約三十種の古写本があり、他の往来とは比較を絶した普及の足跡を示す。江戸時代にはいって盛んに刊行され、普及の速度は倍増した。専ら習字用に編まれた手本系二十九点、読みの指導をも兼ねた読本系三十七点、注解を施した注本系二十四点、挿絵と略解を加えた絵抄系四十九点、計一三九点に及ぶが、江戸後期より末期にかけて、子供の理解にとどき興味にうったえる絵抄系が主流を占めている事実が注目される。

★実語教・童子教　じつごきょう・どうじきょう　両書各一巻一冊。往来物。著者未詳。内容から、『実語教』は中古末期に貴族の手で、『童子教』はやや遅れて中世前期に僧侶の手で、それぞれ作られたものと目される。

【内容】『実語教』は、「山高故不貴、以有樹為貴、人肥故不貴、以有智為貴・・・」と五字をもって一句とし、全編九十六句で構成されている。知恵をもって現当二世に輝く不朽の宝として、この知恵に至る学の途を系統的に論しているのを内容上の特徴とする。『童子教』は、やはり五字を一句とし、三三〇句を連ねてある。来世欣求・穢土厭離の仏教的信仰と、日常生活にかかわる種々の立居振舞・行儀作法について論す。『実語教』の如き系統的な記述はみられないが、「前車之見覆、後車之為誡」はじめ、後世まで格言として用いられた句が数多く収められているのが注目される。

【普及】中世においてすでに、かなり普及し、二教を併せて学ぶ風も生じた。近世に入り、寛永期（一六二四―一六四四）より公刊されて普及に拍車がかかり、近代初頭まで、一般庶民の子弟により、家庭や寺子屋で道徳用往来物の一つとして手広く学ばれた。また、『至要鈔』（鎌倉時代成）はじめ、『教児書』（明暦四年（一六五八）刊）等の類、さらに『俗語教・道戯興（どうようげき）』（元禄十一年（一六九八）刊）の如き、洒落本まがいのものまで輩出されている点でも注目される。

★小野篁歌字尽　おののたかむらうたじづくし　一冊。往来物。近世初期より幕末まで多数の版がある。

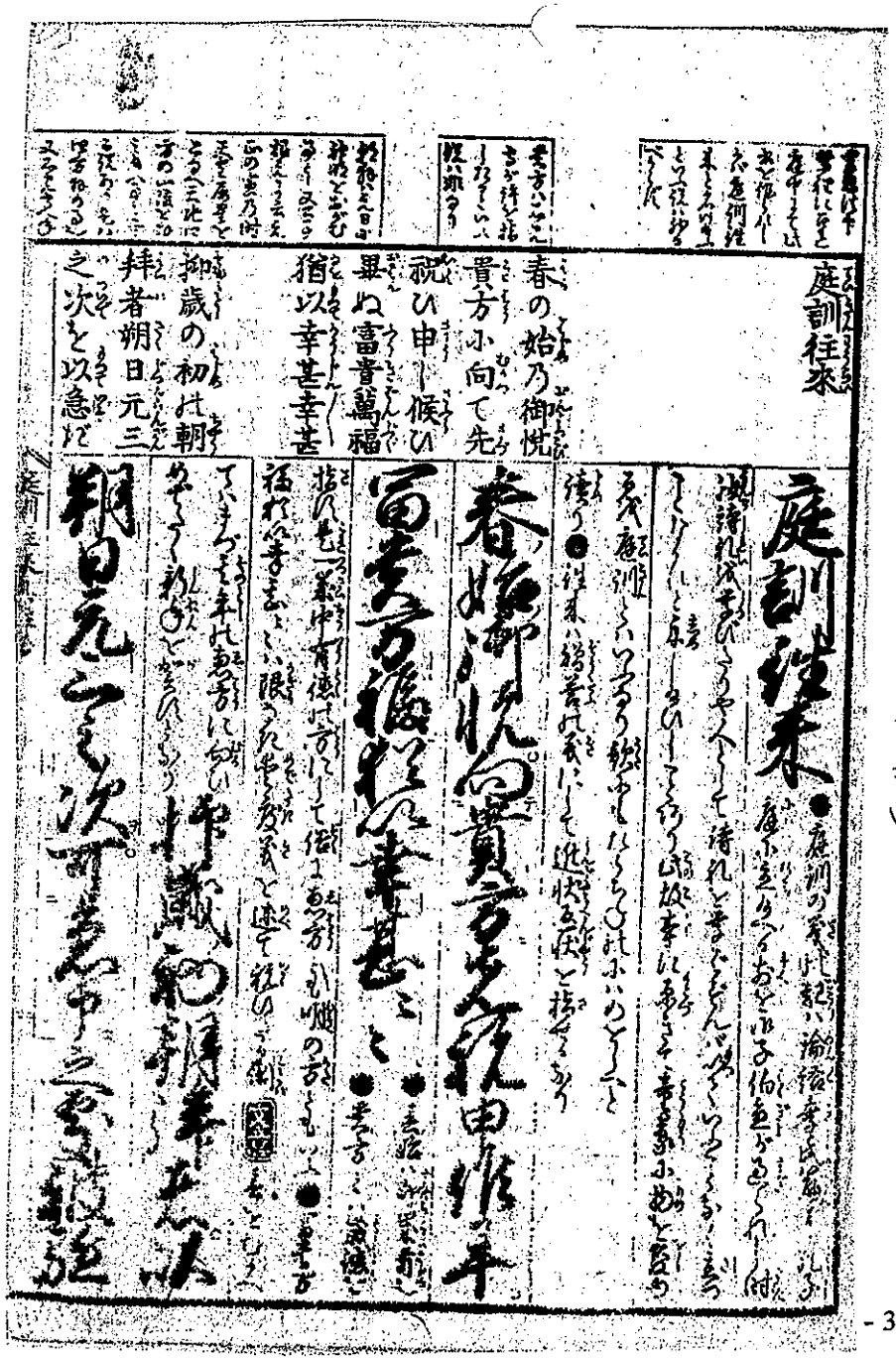
【内容】往来物の中で、語彙科往来の字尽型に属する。手習いの学習に入ろうとする子供が漢字を覚えるための教科書である。上段に編、旁（つくり）などの共通する漢字四、五

個を並べ、下段にそれらをまとめて覚えるための和歌が記載されている。例えば上段に「椿、榎、楸、柊、桐」とあり、下段に「はるつばき、なつはゑのきに、あきひさぎ、ふゆはひいらぎ、おなじくはきり」とある。巻尾に「猫の目にて時をしる歌」「鼻息にて時をしるうた」が付載されている。往来物の中でも初歩的な教科書で、近世町人の間に広く普及した。式亭三馬は本書のパロディーとして滑稽本『小野＝＝字尽（おののばかむらうそじづくし）』を著している。

★古状揃　こじょうぞろえ　一冊。往来物。著者未詳。最古の書写は寛永二年（1625）本（筆者未詳）。同刊本は慶安二年（1649）大阪西村伝兵衛刊の『新板古状揃』。

【内容】古状・擬古状を集録したもので、寛永二年本は、抑童部教訓状・大坂状・手習学問之事等、十二状を収め、慶安刊本は、そのほかに今川状・腰越状・義経含状・弁慶状・熊谷送状・経盛返状等を収録。なお、慶安刊本所収の大坂状中に「家表裏之侍、前代未聞候」の文言があるため、幕府より絶版を命ぜられ、版元の西村伝兵衛は死罪に処せられたとの説が流布しているが、真実でない。

○庭訓往来異注鈔（一八三四刊）



庭訓往来

春の始の御悦、貴方に向て先づ祝ひ申し候ひ訖ぬ、富貴万福猶以て幸甚々々、抑歳の初の朝拝は、朔日元三の次を以て急ぎ申す可きの処、人々子の日の遊びに駈り催さるゝの間思ひ乍ら延引す、谷の鶯の梅の花を忘れ、苑の小蝶の日影に遊ぶに似たり、頗る本意を背き候ひ訖ぬ、将又、楊弓雀小弓の勝負、笠懸、流鏑、小串の会、草鹿円物の遊、三々九の手夾八的等の曲節、近日打続き之を経営す、尋常の射手、馳挽の達者、少々御勝弓有て、思し食し立ち給はば、木望也、心事多しと雖も、参会の次を期せんが為に、委く

腐毫に能はず、恐々謹言

正月五日　左衛門尉藤原

謹上　石見守殿

一 テイキンと読むのは、易林本節用集やヤソ会版落葉集をはじめ、近世に普通のこと。キンは、漢呉音でないとするが、字訓(ヤマ)、十韻抄(ヤマ)、家訓(ヤマ)、測梁(ヤマ)などにも見える字音。「テイキンノソウライ」とするは、元亀本運歩色葉集による。→付1

二 「畢」とする本あり、底本では、全体を通じて「訖」「畢」区区同数を用い、分布も用法も格別の差は認められない。完了の助動詞「ぬ」に同じ。

三 フッキの読み、節用集類による。パンプクの連濁、落葉集や日葡による。

四 本書所収書簡文に常用の句。また「皆以」「敢以」「呉以」「悉以」「尚以」「滅以」「先以」「曾以」「旁以」「尤以」なども見え、「…以」の形式が、書簡文に多いことも明らか。

五 元朝のごきげん伺い。

六 グッンザンの連濁は、節用集類や運歩色葉集「元三日(ヤマ)・元三大師(ヤマ)」による。年の始、月の始、日の始、つまり正月朔。→付2

七 正月になって初めの子(ネ)の日。ネノビとよび。子日遊は、春の野に出て若菜をつみ、小松を根引きする、など、歌や詩の題ともなり正月の行事の最たるもの。→付3

八 日葡補遺に「何事かをするために大勢の人を集めて回る」意と解く。

九 連声で、エンニンと発音。時期をおくらす。

一〇 「楯」は「楯」と同字という。谷の鶯は、寒さを逃れて春の花咲くところに来ぬきを忘れ、小蝶は吸かきとところに早く出るべきなのに日蔭になお遊ぶに似て、時節に適合せず、本意に反した、の意。「小蝶」の用字を載せる古辞書はなく、「胡蝶」が普通。ただし日葡補遺には両方の登録がある。→付4

一一 日葡に、例文「頗る本意を背く」を「ひどく自分の義務を怠る」「義理を欠く」の意とする。

一二 ハタマタと読むこと、節用集類に普通。日葡に文書語として「その上に加えて」と訳す。

一三 伊京集「楊弓　小弓也」。「雀小弓」との区別は不詳。日葡に「アソビニモチユルコユミ　公家やその他身分のある人の遊びに使われる小弓」。→付5

一四 「笠懸」は、普通カサカケ(カサガケの訓ありしこと、旧注二本に記す)。元来は笠を的として疾走する馬上から射たのでその名がある。「流鏑」は底本のみに在る記事。「流鏑馬」とも書く。神事に馬上に走りつつ射る。→付6

一五 運歩色葉集に倒して読く。→付7

一六 「三々九」は、ただ「九」というのと異なり語路をととのえ、吉事を示すいい方。

一七 上に「勝負」「会」「遊」というのに並ぶ表現で、面白い趣好、遊興の意。

一八 読みは、ジンジャウとヨノツネの二種。ヨノツネは「普通」の意。日葡に「ジンジャウ　礼儀正しさ、慎み深さ、重厚さなど」、「ジンジャウナヒト　動作、振舞が慎み深く礼儀正しい人」。

一九 饅頭屋本節用集により「馳挽　ハセビキ」とみとめる。同種の語カケヒクと似ている。ここでは疾走する馬上で弓を引くこと。

二〇 ここの他にも見える用語。「不レ及二腐毫一」「雖レ多二難二申尽一」などの句に前立つ。易林本節用集に見える。「心に思うところ」の意。

二一 サンクッイの読み、節用集、運歩色葉集などに見える。寄り合う意だが、「親しく交際する」「人と面会する」の義に用いる。

二二 日葡の「腐毫」相当の項に引用あり、「このちびた、あるいは、いたんだ筆ではとても書くことはできない」とする。発信者の謙抑の謂い方。

二三 「恐々」の字音仮名遣い、易林本節用集に「ケウケウ」。「謹言」は「ツッシンデマウス」と訓読するも当代の云い方、節用集や日葡に明証あり。「恐惶謹言」と同じ。当代、動詞ツッシムは、ツッシミテの音便形の場合ツッシンデということ平曲などにもしかり。→付8

二四 →付9

二五 →付10

二六 →付11

二七 →付12

○実語教・童子教（一七五七年原刻・一八四四年刊の往来物集成書より）

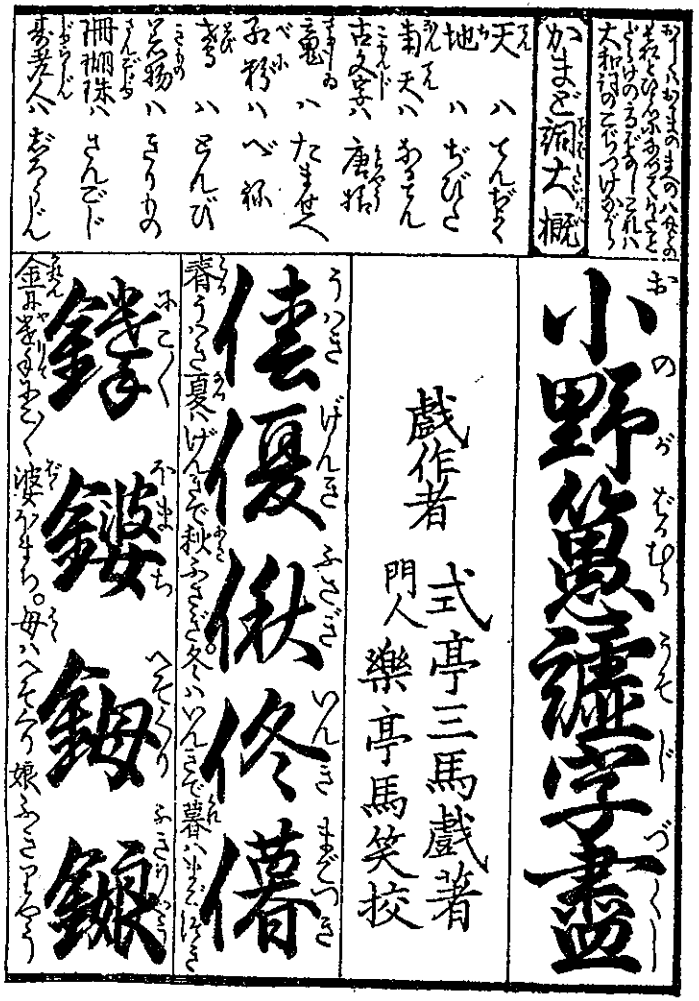
実語教

山高故不貴以有樹為貴
人肥故不美以有智為美
富貴一生敗身滅則兵滅
財宝代代財命終不随身
玉不磨光光為瓦礫
人不学無知愚者為人

童子教

文貴人不成
頭髪不得立
愚道跪己
有左手敬来
赤子為開面
順不顧左右
不問者不言
右作右道問
三寶敬三礼
神明敬拝礼
人間成一種
印鑑計人数

○（右）小野篁歌字尽（一八世紀後半刊）
（左）小野篁謔字尽（一八〇六年刊）



（古状揃上のうち「腰越状」
（右）（往来物集成書）（一七五七年原刻・一八四四年刊）
（左）児読古状揃　明治　註（一八三四年刊）

大日本国畫
五畿七道国
山城　大和　河内
和泉　摂津　播
東海道十五国

腰越状

源義経左怨中上意
状若被撰下代官長者
勅宣使頂朝敵之代
弓箭兵仗事欠摩
下被行忠賞而恩免仰
口遂云被蹈公奥之勲功

腰越状

源義経恐中上意趣者

腰越状

伊豫守源義経ハ幼名牛若丸と云る孔
義朝の九男冠者と称し
兄頼朝々の代官として木曽義仲を討
亡し平家を西海に
攻亡ぼしより内に後白河
兄弟の間を隔るゆゑ頼朝々疑ひ
さしも大功を立し義経を拒て謀叛人
のごとくなるゆゑ兄弟の対面さへ
相州
緘
して
誤なく
者の
謀叛
むゆゑ
食の
事
懇ち大江の廣元を
欲さ
へ
武義坊
辯慶ガ書
変と
ゆ

源義経恐中上意趣者

頼朝々（中上ゆゑ）不の意趣とゆふところ